

高松東ファクトリーパーク造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報

小 谷 窯 跡
塚 谷 古 墳

1997.3

香川県教育委員会

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

例　　言

1. 本書は、高松東ファクトリーパーク造成事業に伴い発掘調査を実施した、小谷窯跡と塚谷古墳の調査概要を収録したものである。
2. 調査は、香川県教育委員会文化行政課が調査主体となり、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。
3. 調査組織は次のとおりである。

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

総括	所長	大森 忠彦
	次長	小野 善範
総務	参事	別枝 義昭
	係長	前田 和也
	主任主事	西川 大
調査	参事	近藤 和史
	主任文化財専門員	大山 真充
	文化財専門員	西岡 達哉
	文化財専門員	谷畠 雅稔
	文化財専門員	喜岡 永光
	技師	信里 芳紀
	調査技術員	森澤 千尋
	調査技術員	福西由実子

4. 調査にあたっては、次の関係機関と関係諸氏から協力を得た。記して謝意を表したい（順不同。敬称略）。
香川県商工労働部産業立地課、三木町経済課、長尾町企画開発課、島根大学総合理工学部教授時枝克安、島根職業能力開発短期大学校校長伊藤晴明、地元自治会、地元水利組合
5. 本書で使用した遺構略号は、次のとおりである。
SK：土坑 SX：不明遺構
6. 本書の執筆は、西岡、谷畠、喜岡、信里が行い、編集を西岡が行った。

本文目次

例 言

本文目次・挿図目次・写真目次

第1章	調査に至る経緯	1
第2章	調査の経過	1
第3章	遺跡の立地と環境	2
第4章	小谷窯跡の調査	4
第5章	塙谷古墳の調査	10
第6章	まとめ	18
報告書抄録		20

挿図目次

第1図	調査位置図	3
第2図	周辺の遺跡地図	3
第3図	第1号窯跡実測図	5
第4図	遺物実測図	8
第5図	弥生時代出土遺物	10
第6図	塙谷古墳A・B地区遺構分布状況	10
第7図	塙谷古墳墳丘東西断面	13・14
第8図	塙谷古墳墳丘南北断面	13・14
第9図	塙谷古墳墳丘測量図	15
第10図	塙谷古墳石室実測図	15
第11図	塙谷古墳石室出土遺物実測図	16
第12図	塙谷古墳出土金属器実測図	17

写真目次

写真1	第1号窯跡完掘状態	6
写真2	第1号窯跡側壁断面状態	6
写真3	第2号窯跡完掘状態	7
写真4	第3号窯跡完掘状態	7
写真5	第1～3号窯跡と灰原	8
写真6	A地区遺構分布状況	10
写真7	S K08須恵器・窯壁出土状況	11
写真8	S X04完掘状況	11
写真9	塙谷古墳全景	11
写真10	塙谷古墳全景	12
写真11	塙谷古墳石室	12
写真12	塙谷古墳東西墳丘断面西半分	13・14
写真13	石室奥壁の裏込め及び墓壙	13・14
写真14	北側周溝及び斜面のカット	13・14
写真15	塙谷古墳埋没列石	16
写真16	塙谷古墳遺物出土状況	17

第1章 調査に至る経緯

香川県教育委員会事務局文化行政課では、高松東ファクトリーパークの建設用地内に、周知の埋蔵文化財である小谷窯跡と塙谷古墳が所在することから、これらの適切な保護措置を講じるために、原因課である香川県商工労働部産業立地課と協議を進めるとともに、平成6、7年間に分布調査と試掘調査を実施した。そして、前者については、3基以上の須恵器窯跡と灰原の存在が、後者については、2基の古墳の存在が予測される結果を得た。

そこで、この調査成果に基づき、文化行政課と産業立地課との間において、遺跡の保護措置の方法についての協議が進められたが、事業の遂行上、各遺跡の発掘調査が必要であるとの結論に達したために、小谷窯跡(8,800m²)、塙谷古墳(7,000m²)。契約名は「塙谷1・2号墳」について調査を実施する方針が決定された。

ところが、事業計画においては、造成工事の開始時期が平成8年度下半期頃に予定されていたために、発掘調査は同年上半期中に終える必要に迫られた。そこで、文化行政課は、調査対象面積が広大であることと、複数の調査班を導入することより、短期間で調査を終える必要性から、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターに調査を委託する方法を選択した。

そして、平成8年4月1日付で、両者の間に「埋蔵文化財調査契約書」が締結され、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターにより調査が開始されたのである。

第2章 調査の経過

調査を受託した財団法人香川県埋蔵文化財調査センターでは、2遺跡の調査対象面積が、概ね近似することから、2調査班を編成し、ともに平成8年4月1日から同年9月30日までの期間で、調査を実施することを決定した。そして、塙谷古墳の調査を直営方式とし、小谷窯跡については、工事請負方式を導入したのである。また、遺構図面の作成に当たっては、一部分を航空測量業者に委託することにした。

まず、小谷窯跡については、3基の須恵器窯跡の存在が予測されていた、谷地形の南斜面(I区)から調査を開始したが、当該地域においては、これらの遺構は全く存在しないことが判明し、焼成土坑1基と灰原の一部分を検出するに留まった。その後、谷地形の最低地部分(IV区)に調査の主力を移し、埋没した自然流路から少數の縄文土器を探取した。さて、同遺跡において、最も重点を置くことになった地域は、谷地形の北斜面(II区)である。すなわち、窯跡3基を検出したのみならず、谷地形の中心部分を包括していたことから、灰層が厚く堆積することが明らかになったのである。なお、III、V、VI区については、急傾斜地であったために、部分的な調査を行ったが、遺構の存在を確認するには至らなかった。

次に、塙谷古墳については、測量調査と、全面調査の範囲を決定するための確認作業の後、古墳前面の狭隘な平坦地部分(A地区)から調査を開始した。当該地域においては、当初古墳の存在が予測されていたが、焼成土坑4基と相当数の性格不明の土坑を検出することができ、小谷窯跡との関連性が示唆された。その後は、古墳(C地区)の調査に重点を置いたが、同時に、谷地形の開口部(B地区)についての調査を行った。その結果、傾斜面において3基の焼成土坑を検出することができた。

なお、検出した遺構の時期決定の補助資料を得ることを目的として、熱残留磁気測定を島根大学総合理工学部時枝克安教授に依頼しており、現在分析作業中である。

また、各遺跡の関連調査として、仏教大学園部キャンパス開発室（京都府船井郡園部町壹ノ谷窯跡群）と、奈良国立文化財研究所藤原京跡発掘調査部へ職員を派遣した。

ところで、上記の2遺跡の調査に並行して、三木町井上の丘陵上と、大川郡長尾町昭和の丘陵上および緩傾斜地の3地点において、3遺跡の予備調査を実施したが、全面発掘調査を必要とする内容を確認するには至っていない。

第3章 遺跡の立地と環境

小谷窯跡・塚谷古墳は、木田郡三木町井上に所在し、西に立石山を望み、さらにその西側に高松平野を見渡す雲附山西斜面の、標高90~100m程の同一丘陵上に築かれている。東にある長尾町とは、地元の井上から雲附山を通っての交流があったようだ。また、その雲附山を越えて北に向かえば、約3kmで度志湾に至り、小谷窯跡・塚谷古墳のすぐ脇を通る細道を利用して志度方面との交流もあったと言い伝えられている。

三木町においては近年埋蔵文化財の調査が急増し、資料の蓄積とそれに伴う歴史の解明が進んできている。周辺の遺跡に目を向けてみると、縄文時代以前については未だ不明瞭な部分が多いが、約3.5km西の高松市前田東町に位置する前田東・中村遺跡においては、包含層から縄文時代後期の津雲A式が少量ではあるが出土し、旧河道からは、同じく縄文時代後期の彦崎K-I式を中心とする土器がまとめて出土しており、三木町内でも今後検出される可能性が高い。

弥生時代に入ると、小谷窯跡・塚谷古墳の南西にある香川大学農学部構内の農学部遺跡において弥生時代前期の土器が出土しており、香川県教育委員会の試掘・立会調査によって敷地南半分に同時期の集落が展開している可能性が指摘されている。弥生時代中期では、南の鹿伏・中所遺跡で集落の形成が開始されており、同時期の竪穴住居跡、掘立柱建物跡などが多数検出されており、広範囲且つ長期間にわたって生活が営まれていたようである。さらに、南の白山では、竪穴住居跡や箱式石棺が山の中腹で検出されている。砂入遺跡においても弥生時代中期を中心とした遺構・遺物が検出されている。後期の遺跡は、町内各地で検出されており、集落の展開が急速に進んだことが伺える。前出の鹿伏・中所遺跡でもこの時期の竪穴住居跡が数十棟検出され、土器棺を主体とする墓域も形成されている。集落に接する河川や溝内には木材を用いた構築物も認められた。南にある西蒲谷遺跡では、竪穴住居跡や段状遺構、祭祀遺構などが検出されている。また、池戸八幡神社1号墳は前方後円墳の墳丘墓である可能性が指摘されており注目される。

古墳時代については、前期から中期前半にかけての遺跡は明らかではない。中期後半では香川医科大学の南にある、組合せ箱式石棺を中心とする古墳が多数存在する権八原古墳群が古式群集墓として著名である。後期段階では、高松市との境、男井間池を囲む丘陵地帯に横穴式石室をもつ群集墓が数多く築造されている。鹿伏・中所遺跡の東には天神山古墳群、さらにその東には鳥打古墳、鳥打大西谷1・2号墳がある。長尾町に入ると、7世紀後半まで追葬に利用されていたと推測される縁が丘2号墳、藤浦1・2号墳がある。

古代の遺跡では、白鳳期から奈良時代にかけて建立されたと考えられる古代寺院の始覚寺・香蓮寺が男井間池の東側に位置している。旧長楽寺跡も、鹿伏・中所遺跡の南に位置している。

また、同時期の集落遺跡が南天枝地区で確認されている。小谷窯跡・塙谷古墳の北には、全長8.7m・最大幅2m・高さ1mの規模を持つ末1号窯跡、2・3号窯跡がある。

砂入遺跡の南西の水田内には小さな塚が存在し、中世の大塚城跡として伝承されている。この他、中世の山城として、畜産試験場近くに長嶺城跡、香川大学農学部の北西に池戸城跡、鹿伏・中所遺跡の北には高岡城跡、高松市に入って前田東・中村遺跡の北西には前田城跡がそれぞれ位置している。



1 梶社古墳	13 立石塚	25 丸山古墳	37 (仮) 開川通跡B
2 塙谷古墳	14 七ツ塚古墳	26 多和村古墳	38 白羽池の内古墳
3 西浦谷古墳	15 雷士の越山頂遺跡	27 小谷史跡	39 白羽1号墳
4 沼戸西浦古墳	16 始登寺跡	28 塙谷古墳	40 白羽2号墳
5 高尾遺跡	17 尾崎理	29 萩浦1号墳	41 茶臼山古墳
6 植八原B地区古墳群	18 鳥打古墳	30 萩浦2号墳	42 (仮) 開川通跡C
7 植八原A地区古墳群	19 野越古墳	31 箕ヶ丘1号墳	43 (仮) 志度城跡跡
8 池戸大宮八幡古墳	20 萩山腰塚	32 箕ヶ丘2号墳	44 (仮) 萩村3号墳
9 池戸八幡神社1号墳	21 石碑塚	33 箕ヶ丘3号墳	45 (仮) 萩村2号墳
10 慈徳寺跡	22 原道跡	34 鶴窓古墳	46 第32子備調査地(三木町井上)
11 植八原遺跡	23 首切地窯跡	35 八丁通跡	47 第23子備調査地(長尾町昭和)
12 風呂谷古墳	24 小谷塚	36 (仮) 開川通跡A	48 第12子備調査地(長尾町昭和)

第2図 周辺の遺跡地図

第4章 小谷窯跡の調査

第1節 土層序

当該遺跡地の地形は、東から西方向に傾斜する小規模な谷部と、その下位の、南西方向に開口するやや規模が大きい谷部に分割することができる。

調査の結果、前者については、果樹園の造成工事と、自然の土砂崩落のために土地改変が著しく、地表面を形成していた腐植土の直下において、遺構の埋没を確認することができた。したがって、窯跡については、3基ともに既に天井部が失われているのみならず、第2、3号窯跡については、遺構の大部分が失われていることが判明した。

一方、後者については、近年の水田造成工事における造成土が厚く堆積していただけでなく、旧状がV字型の横断面を呈する谷地形を呈していただために、多量の土砂が堆積しており、灰原が良好に保存されていることがわかった。

第2節 遺構の検出状態

検出した主要な遺構は、須恵器窯跡3基、焼成土坑1基、灰原である。

まず、須恵器窯跡は、いずれも谷地形の北斜面に構築されていることが判明しているが、第1号窯跡がその最奥部の標高約93～95mの位置に所在するのに対して、第2、3号窯跡は、尾根の稜線に近い標高約89～90mの地点に所在することがわかる。しかも、第2、3号窯跡については、各遺構の中心軸が平行する方向性を示すこと、近接した位置関係を示す特徴が認められる点において注意を要すると考えている。

次に、焼成土坑については、谷地形の南斜面の標高88～90mの地点に構築されており、調査対象地域全体についてみると、7基が中央稜線の東部に位置するのに対して、同西部における唯一の遺構となる。

さて、灰原は、第1号窯跡の直下から、谷地形の底面に沿って、水田面の下位まで堆積している。特に地形の変換点における堆積が厚く、層厚約100cmを測ることができる。

第3節 遺構と遺物

1. 第1号窯跡

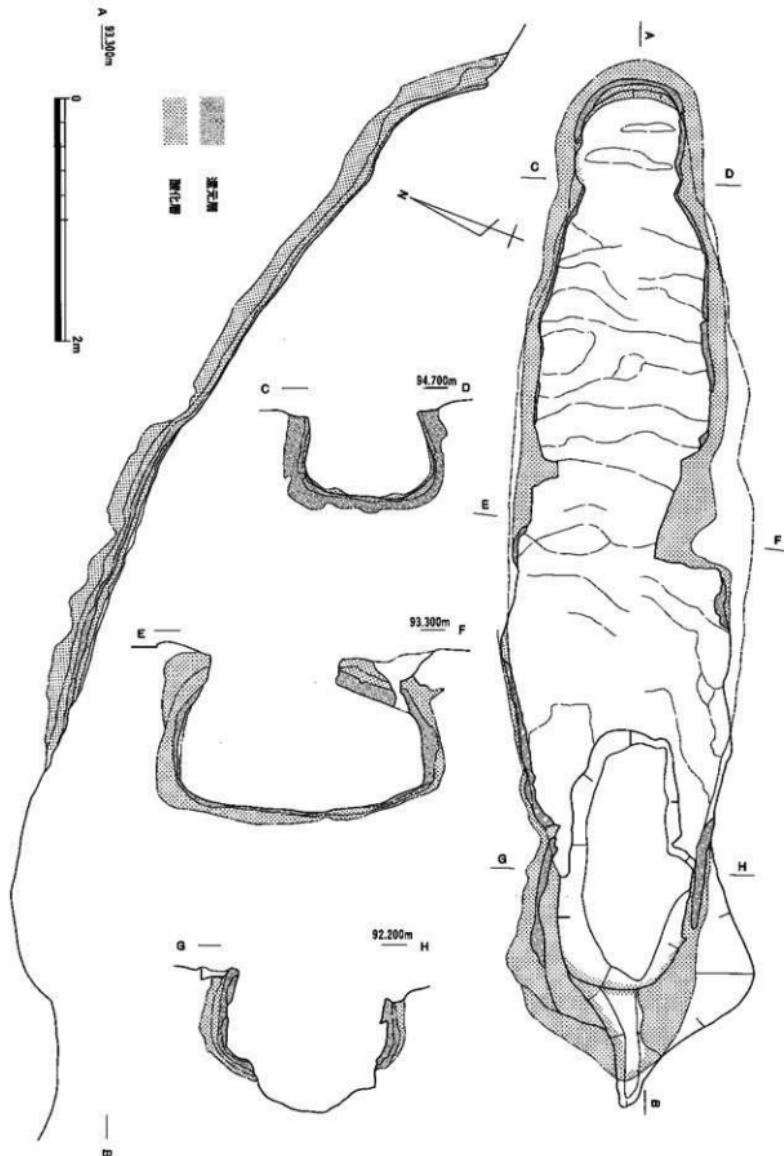
(1) 形態と規模

原形は、天井部が地表面に露出していたことが推測できることから、いわゆる半地下式窯窓に分類することができると考えられる。

窯体の平面形態は、両側壁が、煙道部においてほぼ平行な位置にあるものの、焼成部の中央部分において最も外方向に張り出した後、焚口部に向かうにしたがい緩やかに閉塞することがわかる。

そして、床面は平滑に整形されているが、その傾斜角度は、第1次床面において、燃焼部約16°、焼成部約40°、煙道部最大約70°を測り、煙道に至ってはほぼ垂直に立ち上がる。

また、側壁については、焚口部において床面に対して、ほぼ垂直に構築されているが、その他の部位においては緩やかな曲線を描くことにより、天井部に至ることが観察できる。したがって、滅失した天井部については、半円形の蒲鉾形の横断面を呈していたことが容易に推察で



第3図 第1号窓跡実測図

きるのである。

なお、窯体の規模は、全長9.06m、最大幅2.2m、床面から遺存する天井部までの最大の高さは1.48mである。

(2) 構造

既に記したとおり、検出することができた部位は、煙道部、焼成部、燃焼部、焚口部に大別することが可能であるが、天井部が原位置を留めていないために、煙道と焚口の末端の細部の構造については明らかにすることはできなかった。

さて、被熱により、最も硬化していることが判明した側壁と第1次床面については、基盤土を開削した後に、2次的な加工を施すことなく、窯壁として利用していることがわかる。さらに、焼成部から燃焼部の同床面上に、炭化物、木炭灰、須恵器の未製品の破片を混合した土壤を充填することにより、第2次床面を構築していることが明らかになったが、第1次床面に比して、軟弱であることから、使用回数が少ないことが推察できるのである。

さらに、構造上の特徴としては、燃焼部床面を長楕円形に開削することにより、いわゆる舟底状ピットを設けている点があげられる。そして、同遺構は、第2次床面の構築時においても、同規模の施設として維持されていることが判明している。

(3) 埋没状態

窯体内部に堆積していた土壤の大部分が、黄色あるいは白色系の花崗岩の風化土壤であり、窯体の傾斜方向に平行して重層的に堆積していることから、基盤土が流入することにより、遺構は、漸次的に自然埋没したことが推察できる。そして、窯壁が床面直上の土層序のみならず、堆積層の中・上位においても混在することを知り得たことから、その崩落回数についても、複数回生じたことが推測できるのである。

ところが、舟底状ピットの内部については、いずれも粒子の細かい砂が堆積していることが判明している。しかも、炭化材の小片の混入が認められることから、除湿を目的として、人為的に埋められたことを想定することが可能であろう。

(4) 遺物の遺存状態

窯体内部の堆積土中に包蔵されていた遺物は全て須恵器である。その数量は、下位の土層ほど増加するが、特に燃焼部から焚口部にかけての位置に多く遺存することがわかる。

採取した遺物の種類は、蓋、高台付杯、高杯、壺、甕が主体であるが、なかでも小型品の数量が多い点に注意される。また、大型品の多くは、床面付近において採取することができた。

なお、床面付近において採取した、被熱の弱い軟質の資料については、人為的に配置されたことを想定することもできることから、焼成台としての用途を考える必要があるであろう。

さらに、煙道部において採取した甕については、同部の閉塞用に用いられた可能性があると



写真1 第1号窯跡完掘状態



写真2 第1号窯跡側壁断面状態

考えている。

2. 第2号窯跡

(1) 形態と規模

遺構の上部の大部分が滅失しているために、原形を復元する資料が欠如しているが、基盤土の開削深度が小さいことから、窯体の大部分が地表面に露出した寄窯の形式であると考えられる。

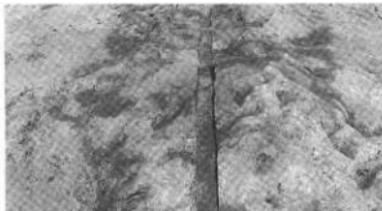


写真3 第2号窯跡完掘状態

平面形態は、両側壁がほぼ並行する直線状を呈しており、煙道部において隅丸方形に変化することにより、閉塞する。

床面は、平滑に整形されており、傾斜角度は約23°を測る。

また、側壁については、床面に対してほぼ垂直に立ち上がる事がわかるが、上部の形態を復元する部位は全く遺存していない。

窯体の規模は、全長4.58m、最大幅0.95m、床面からの高さ0.13mである。

(2) 構造

遺存する部位は、煙道部と焼成部の一部分であると考えている。このうち前者については、側壁の傾斜角度から、直立する煙道の構造を有していたことが推察できる。

他の部位については、構造を知り得る資料が存在しない。

(3) 埋没状態

花崗岩の風化土壤と考えられる堆積層を確認したが、埋没過程については判然としない。

(4) 遺物の遺存状態

須恵器が燃焼部と焚口部において各1点と、煙道部において数点が遺存していた。特に、煙道部の南半部分において採取した、須恵器甕については、火炎の調整を目的として転用されたことが推測できる。

3. 第3号窯跡

(1) 形態と規模

遺構の遺存状態が極めて不良であったために、窯体の形態については判然としないが、基盤土を開削することにより、床面を整形していることから、原形は寄窯の形式であったことが推測できる。

検出することができた窯体の部位については、煙道部と焼成部の一部分であると考えられ、平面形態は、側壁がほぼ平行して直線状を呈した後に、煙道部において梢円形に変化することにより、閉塞する。

床面は、平滑に整形されており、傾斜角度は約16°である。また、側壁は床面に対して、ほぼ垂直に立ち上がるが、側壁の上部と、天井部の形態については、全く不明である。

窯体の規模は、全長1.5m、最大幅0.63m、床面からの高さ0.12mである。



写真4 第3号窯跡完掘状態

(2) 構造

特筆すべき構造上の特徴は認められない。

(3) 埋没状態

窓体内部の堆積土は、層厚が極めて小さいために、埋没過程を知ることが困難である。

(4) 遺物の遺存状態

遺存する遺物は、皆無であった。

4. 灰原

第1号窓跡の焚口部の直近から、谷地形の底部の傾斜にしたがって、総延長約46.8m、最大幅約18mにわたって、堆積していることが判明した。

土層序は、3層に大別することができるが、各層序が3基の窓跡の個々に伴うか、あるいは第1号窓跡のみの関連遺構であるかについては、後世の土地改変により、第2、3号窓跡との位置関係が隔絶した状態を呈するために、明らかにできていない。

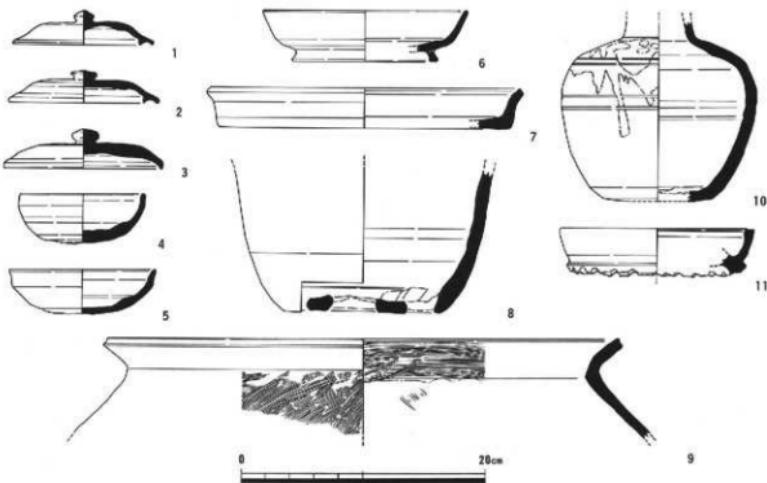


写真5 第1～3号窓跡と灰原

5. 出土遺物

採取した遺物の大部分は、灰原に包蔵されていた須恵器であり、器種については、蓋、杯、高台付杯、高杯、皿、壺、壺、甑、甌が含まれることを確認している。

上記のうち、蓋(1～3)、杯(4、5)、高台付杯(6)、皿(7)、甌(8)、壺(9)、壺



第4図 遺物実測図

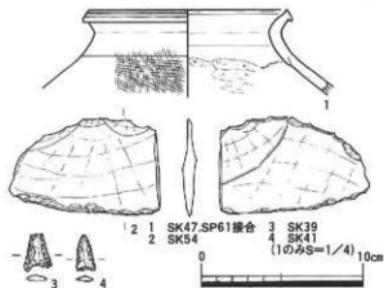
(10), 砥 (11) について図示した。特に蓋については、形骸化したかえしを有する器形（1, 2）と、端部を下方に屈曲させた器形（3）が混在することがわかる。また杯（4, 5）は矮小化した器形である。甌（9）は、胸部外面と口縁部内面に細いハケ目調整の痕跡をみることができることから、土師器の成形技法が用いられていることが推察できる。11は、円面硯である。

第5章 塚谷古墳の調査

第1節 塚谷古墳周辺の遺構について

1. 弥生時代後期

S K47 A地区北半部において検出した土坑群のうちのひとつである。直径0.3m、深さ0.2mの円形の土坑である。出土遺物として1の甕形土器の口縁部がある。口縁部の形態、外面の沈線などから後期初頭に位置づけられる。また、S P61より出土した口縁部と接合した。



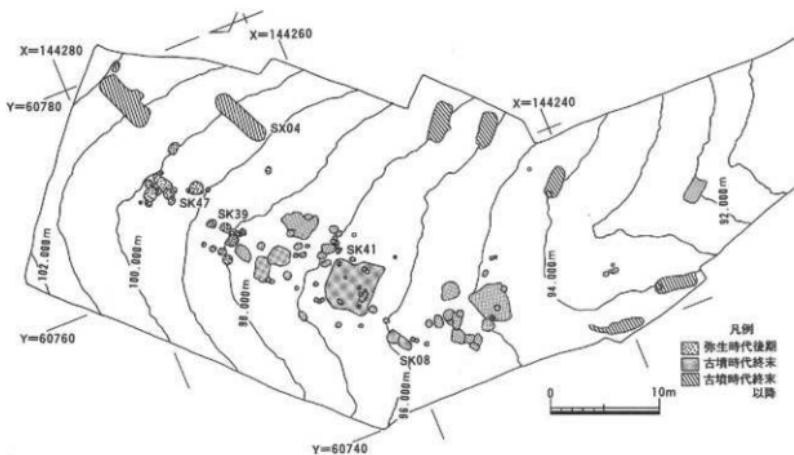
第5図 弥生時代出土遺物



写真6 A地区遺構分布状況

S K39 A地区北半部の南に向かって極端に傾斜する斜面において検出した。直径0.4cm、深さ0.3cmを測る。出土遺物には2のサヌカイト製の打製石器がある。同じく後期前葉と思われる。

S K41 A地区の中央の平坦部分において検出した楕円形の土坑である。直径0.5m、深さ0.2mを測る。2はサヌカイト製のスクレイパーである。石包丁の可能性もある。



第6図 塚谷古墳 A・B地区遺構分布状況

2. 古墳時代終末

S K 08 A地区南西隅の第1号窯跡に接する部分で検出した直径1.2m、深さ0.2mの梢円形の土坑である。古墳時代終末期の遺構は弥生時代後期のシルトとは違い暗青灰色粘土である。またこの埋出土遺物は提瓶の口縁部と窯壁がある。この窯壁は隣接する小谷窯跡のものと思われる。

3. 古墳時代終末以降

S X 03 A地区北東隅の東斜面において検出した梢円形の焼成土坑である。直径2.9m、幅0.7mを測る。埋土は炭化物屑が堆積し、床面付近では若干の焼土を含む。床面が非熱により赤変している箇所や壁面に粘土を張り付けている箇所も認められる。確定は避けたいが伏焼きの炭窯の可能性がある。出土遺物としては10世紀代の須恵器が1片出土しているが混入の可能性もあり時期決定の材料としては乏しい。今回の調査では同じ焼成施設と思われる土坑を小谷窯跡で1基、塚谷古墳の7基のうち2基において熱残留磁気測定を行っている。本報告時には理化学的年代測定の結果も考慮し、これら焼成施設の性格づけ、及び年代決定を行いたい。

第2節 塚谷古墳の調査

1. 立地 塚谷古墳は小谷窯跡が所在する尾根の東側の谷の最も奥部に造られた。北周溝の掘り方(109.4m)から南墳端(104.9m)の比高差が4.5mという谷部斜面に立地する。また南北方向に開ける小谷窯跡側の開析谷を下った平野部からも眺望できない位置にある。

2. 墳丘 前述した通り4.5mという比高差の場所に構築されているため構築以前の地面より

現存する墳丘上面は約3.5mを測った。立ち割り調査の結果、南北14.8m(15.4m北周溝を含む)・東西14.2m(15.7m東周溝を含む)の15m程の石室が南に開口する円墳であると判明した。

3. 墳丘の特徴と構築過程(第9図参照) 以下各構築段階別に盛土の特徴を記述する。

まず北西尾根部から北側、東側斜面を掘り周溝を掘る。そして次に墓壙を掘る。この墓壙は平面形は半月状で横から見ると北から南へ傾斜する斜面を断面三角形にカットした状態の墓壙である(第9図参照)。この時点である程度墳形、開口方向、石室規模が決定される。断ち割り調査では旧表土は確認されなかったが、周溝と墓壙以外に地山整形は行っていないと思われる。次に東西南北で墳丘を四分割した場合、ほぼ南西部分の墳丘のなかで一番標高の低い部分に黄褐色粘質土と灰白色粘土を版築し、さらに黒灰色系粘質土を盛り上げる。この黒灰色系粘質



写真7 S K 08須恵器・窯壁出土状況 南から



写真8 S X 04完掘状況 南から



写真9 塚谷古墳全景 南から

土は旧表土ではなく、また何層かに細分でき、墳丘各所に見られることなどからこの黒褐色系の盛土は構築作業単位を表すとともに墓域の選定といった性格も有する可能性も考えられる。

ここまでの一連の作業は連続して行われた可能性が高い。また墳丘南西隅に溝状の土留のような構築をしていることも分かる。次に石室床面のレベルまで版築を行う。前述した黒灰色粘質土の上に褐灰色系粘土と灰白色粘土を交互に版築し、さらに茶褐色粘土と灰白色粘土を交互に版築している。この段階で石室石材と同様の人頭大からやや大きい石材を墳丘南西部分に込めながら版築している。後述する石室の羨道部東側基底石が途絶える部分の東側墳丘内でこの基底石とほぼ同じレベルで人頭大の石材が4個並ぶ状況が確認できたが、この部分以外では石材は単独で列をなさない為、これらは土留めの性格をもつ石材と判断した(写真15参照)。これらの版築作業によって石材抜き取り穴や石材の法量から判断できる羨道部分までの石室構築のための平坦面を確保が行われた。ここまででの作業は墳丘全体でも南西部に限られた版築作業といえる。次に石室の構築とそれに伴った墳丘構築が行われている。奥壁から3番目の側壁石より南の石材は墓壙内ではなく完全に墳丘盛土の構築と同時に据えられている。基底石より上段の石室石材は依存していないため盛土と石室の上部構造との関係は不明とならざるを得ないが石室両サイドの盛土の版築状況が同様のあり方を示すことからある程度天井石高架までに石室構築と同時に盛土を版築していったのであろう。そして最後に墳丘の外側に化粧土としてやや大きな単位の盛土を行っている。

以上の点を総括すると構築プロセスは周溝・墓壙の掘削→基底部の盛土の版築(墓域の選定)⇒石室床面のレベルまでの版築⇒石室基底石の設置と裏込め⇒石室両サイドの盛土の版築⇒石室の完成⇒墳丘外面の化粧土としての盛土を行う。以上の順番となる。

4. 石室構造(第8図参照) 前述のとおり古墳の遺存状態がよくないため石室の構造を十分に明らかにすることはできない。以下復元を交えながら解説する。

位置・方向 前述したとおり斜面のコンターラインに直行する形で開口方向を南へ向ける横穴式石室である。開口方位はS-9°Eである。現存する石室石材から類推すると石室の墳丘内の位置はやや北側の尾根部に偏ったあり方をしているが、これは本古墳が尾根部を避けて谷部の斜面に立地する為、東側斜面に石室位置を設定せざるを得ないためだと思われる。

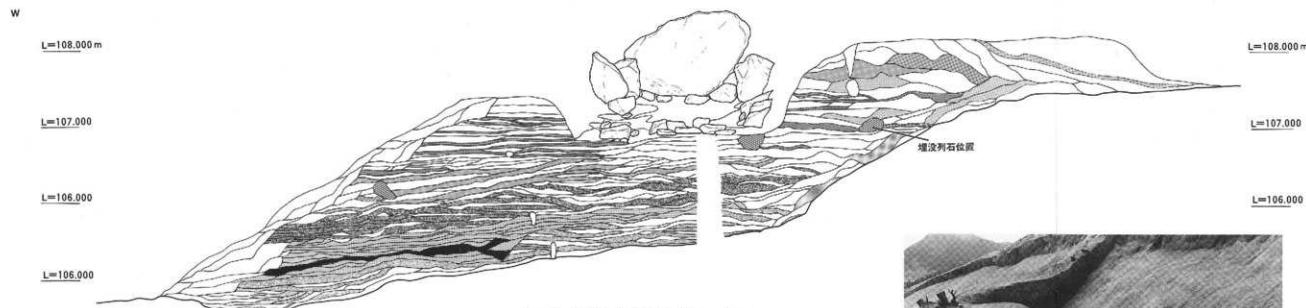
規模・形態 基底石は玄室、羨道部ともに完存していないため規模、プランともに復元は厳しい。現存する基底石、抜き取り穴から推測すると、奥壁より開口部へ向かって2番目の基底石の大きさが長さ1m高さ0.6m程の塊石を用いているのに比べて、奥壁より開口部に向かって抜き取り穴を経て3番目の基底石の石材が長さ0.4m高さ0.2m程の板状の石材を用いている事からも玄室と羨道を区別する意識とこの間の抜き取り穴のどれかに袖石があったと推測できる。



写真10 塚谷古墳全景 西から



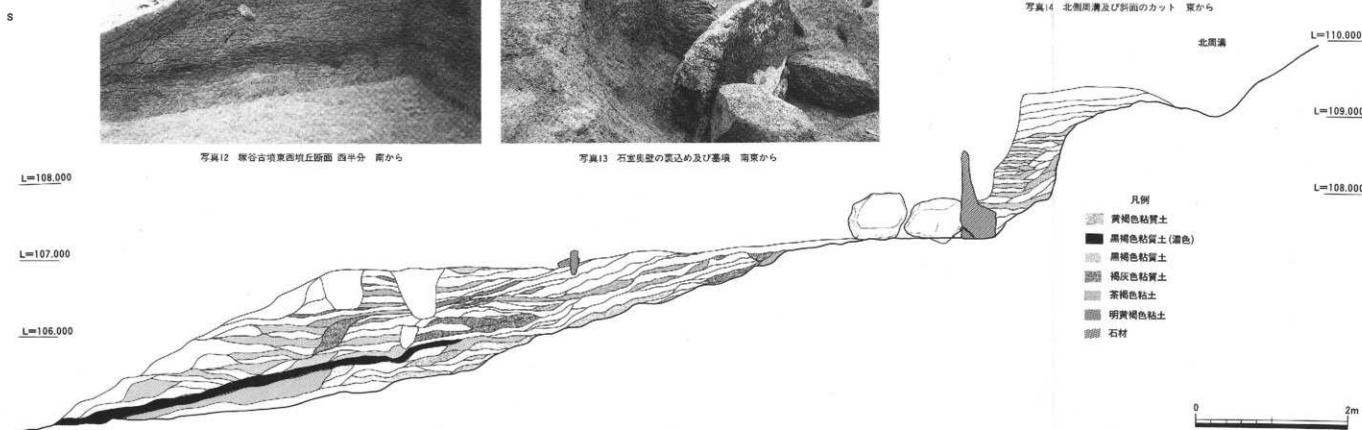
写真11 塚谷古墳石室 南から



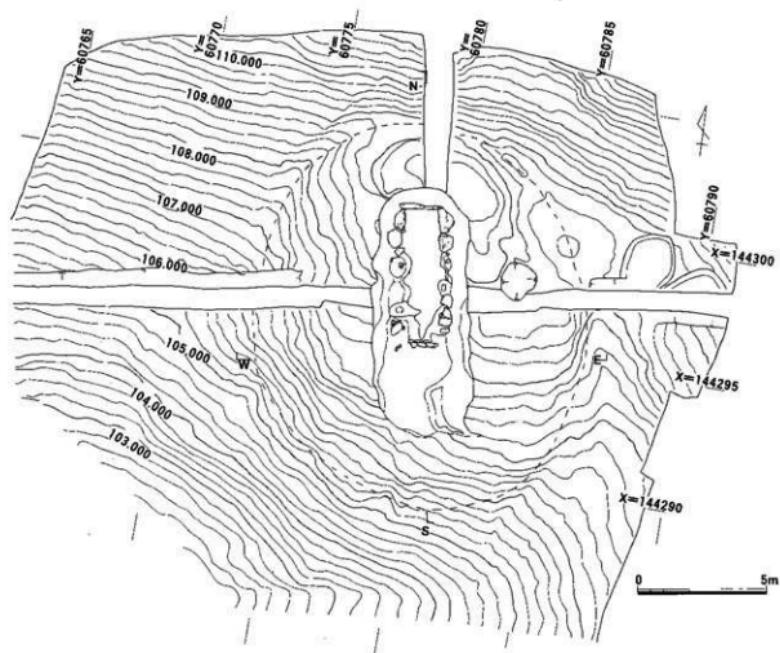
第7図 塚谷古墳墳丘東西断面 南から



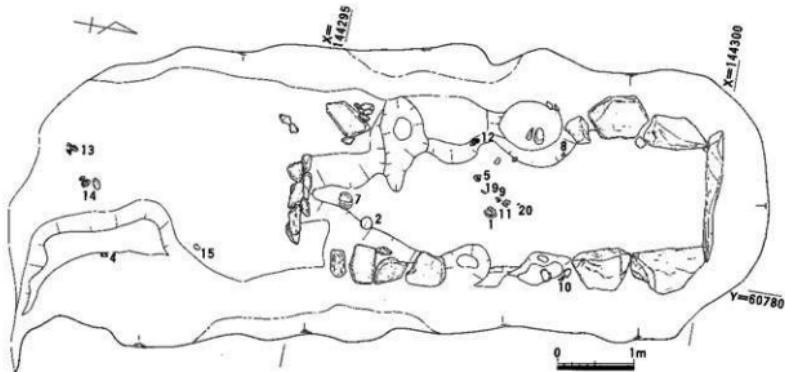
写真14 北側削開及び斜面のカット 東から



第8図 塚谷古墳墳丘南北断面 東から



第9図 塚谷古墳墳丘測量図



第10図 塚谷古墳石室実測図

以上のことから玄室規模は奥壁部分で幅1.1m、奥壁より2番目の基底石の部分で幅1.2mを測る。羨道部に関しては現存する基底石が東側しかないので規模に関しては不明と言わざるを得ない。羨道部基底石が無くなる辺りで南北石室主軸中央ラインに直行する楕石と思われる石材群を検出した。この石材群は盛土に垂直に刺さる形の3枚の板石とそれに接する形で南側に東西に板石を4枚並べる形で構成されている。こ

の楕石より開口部よりでは基底石や抜き取り確認できず、床面のレベルも15cm程度下がることなどから、断定はできないが構築当初の羨道部分はこの辺りまでであった公算が高い。

床面の状況 床面は疊敷ではなく玄室部分は地山削り出しで羨道部分は墳丘の盛土の上面が床面となっている。後世の搅乱等により石室内の遺物が散乱している状況などから消失してしまったか、あるいは当初から明確な床面を構築していない可能性もある。

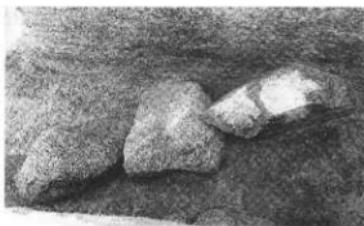
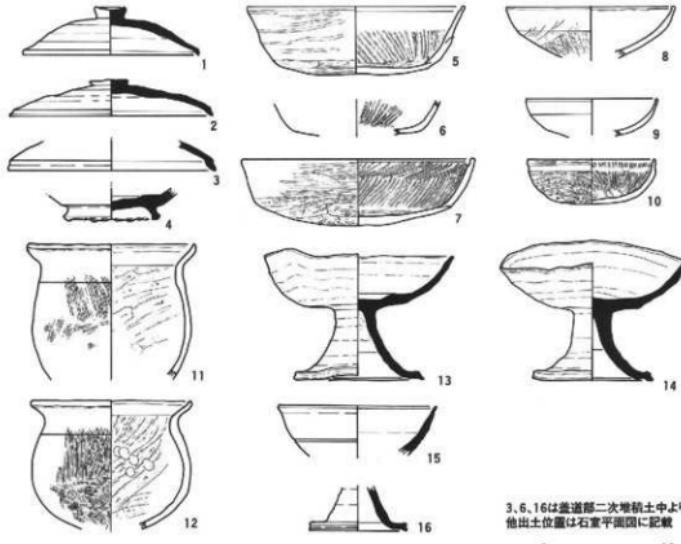


写真15 塚谷古墳埋没列石 南から



3, 6, 16は羨道部二次堆積土中より
他出土位置は石室平面図に記載



第11図 塚谷古墳石室出土遺物実測図

5. 出土遺物（第11図参照） **出土状況** 遺物2, 7, 13, 14を除いては完形で出土は無かった。石材抜き取り時や盗掘時の石室床面まで及ぶ搅乱がひどい為、出土遺物の元位置や追葬時のかけだし、鉄釘出土位置からの棺配置などの復元は難しい。これは石室破壊後の二次堆積土中の土器片と床面直上出土遺物との接合や石室内での遺物の接合状況からも搅乱の状況が伺い知れ

る。以下遺物の特徴や帰属時期について解説する。詳細な出土位置や接合関係は本報告時に明らかにすることとする。

須恵器・土師器 1～3は須恵器杯蓋である。いずれも内面の返りをもたない。13～16は無蓋高杯である。13.14は墓道部分より並んで出土している。15.16は羨道部二次堆積土中からの出土である。5.6は土師器の杯である。外面は底部を横方向のヘラケズリ施し、上半部にヨコナデを施した後ヨコミガキを施す。内面は右上がりの放射状のヘラミガキを施し、見込みに右廻り螺旋状のヘラミガキを施す。7.9.10は杯である。7は2の須恵器の杯蓋と逆さまになつた状態で並んで出土している。外面は底部を横方向のヘラケズリを施し、上半部は横方向の密なヘラミガキ、底部に少条のヘラミガキを施す。内面は右上がりの放射状のヘラミガキを二段に施し、見込みに右廻りの螺旋状のヘラミガキを施す。10は玄室の側壁基底石抜き取り穴より出土している。外面下半部を横方向のヘラケズリした後、上半部を横方向のヘラミガキを行っている。8は5や7などの暗文を施す土師器の杯を模倣して制作したもので、5.7.10が赤燈色を示すのに比べて褐灰色を示す。また、調整や器形にも微妙な差異が認められる。

金属器 17～20は鉄釘である。前述したが出土位置は一定しないため、代表的なもののみ記した。いずれも鍛打によって折り返しを作りだし、釘としての機能をもたせている。19.20には木質が残存していた。21は中空銅地鍍金の耳環である。羨道部二次土中より出土。製作技法は一枚の銅板を折り曲げ円柱状にし、そしてさらにC字形に折り曲げて作られている。

その他の遺物 図化はしていないが石室内より窯壁が4点出土している。この窯壁は小谷窯跡のものと思われる。石室内に窯壁が供される類例として坂出市の打越窯に近接する神懸神社古墳がある。窯跡に隣接する古墳であり塚谷古墳と同様のあり方を示す。鉄滓の供獻を行う事と同様に解釈してもよいと思われる。小谷窯跡と塚谷古墳を結びつける重要な資料となり得ると思われる。

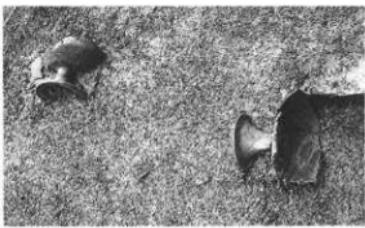


写真16 塚谷古墳遺物出土状況 南から



第12図 塚谷古墳出土金属器実測図

第6章 まとめ

第1節 小谷窯跡について

今後の検討課題を掲げる。

1. 窯体の形態と構造

まず、第1号窯跡と、第2、3号窯跡の形態と規模が大きく異なる点に注意したい。前者は、全長9mを超える、大型の須恵器窯であるとともに、焼成部の側壁が外方向に拡張して構築されているために、同部に広い内部空間が存在する特徴を有するが、後者の2基については、遺構の遺存状態が悪化していることを考慮するとしても、原形は小型であり、側壁が直線状を呈するために、各部の内部空間の規模についても、小さいことが推察できる。これらは、生産された製品の大きさ、同時に焼成される製品の数量、熱効率等の相違に起因することが考えられる。

次は、第1号窯跡が、窯体の大部分が地表面下に埋没した地下式構造であるのに対して、第2、3号窯跡は、床面の掘削深度が小さいことから、窯体の露出部分が多い構造を復元することができる点において異なることがわかる。すなわち、前者については、燃焼部の規模を大きくするため、露出部分を小さくする必要があり、後者の2基は、同部を大きく成形する必要に迫られなかったために、基盤土の開削深度を最小限に留めることができたと推察することができよう。

また、焼成部の床面の傾斜角度については、第1号窯跡が約40°の急勾配を呈するのに対して、第2、3号窯跡は、約20°前後の緩傾斜であることから、窯体構造の相違により、熱効率の差違が生じていたことが推測できるのである。

ところが、3基の窯跡に共通する特徴としては、煙道部の側壁が直立する構造を示す点が注目されることから、当該地域において、普遍的な窯体構造として位置付けることができると考えている。

2. 窯体の立地

3基の窯跡は、全てが焚口部を西方向に開口するための地形を選択して構築されていることがわかる。

しかしながら、第1号窯跡は、谷地形の広い急傾斜面に立地するのに対して、第2、3号窯跡は、尾根の頂部に近い、狭小な緩傾斜地に所在する点において異なっていることから、個々の窯体構築時において、その規模を考慮した選地が行われていることが推察できる。すなわち、第1号窯跡は、窯体全体の規模と床面の深さを大きくすることを意図して、基盤が軟弱な広い傾斜地を選択しているが、第2、3号窯跡については、それらの必要がないために、堅い基盤が露出する狭小な地点に構築することができるであろう。

3. 年代観

3基の須恵器窯跡を検出することができたが、窯体内部に遺存する遺物と、窯体と灰原の関係から、遺構の操業年代を推定することが容易な遺構は、第1号窯跡である。そして、第2、3号窯跡については、操業年代を特定するには時間を要するが、両遺構が近接した位置関係を

示すことと、個々の主軸方向が完全に合致することから、近似した時期の操業を考えることが妥当であると考えている。

さて、従前から小谷窯跡については、採集遺物を資料とすることにより、6世紀後半頃から7世紀前半頃の操業年代が想定されていたが、第1号窯跡の窯体内部と、灰原から採取することができた須恵器蓋・杯、高台付杯、高杯、甕の中心的な器種について観察すると、中村浩氏が提唱した第II型式第6段階から第III型式第1段階頃の資料に分類することができる。すなわち、これらの型式については、近年7世紀中頃以降に比定されていることから、同窯跡の操業時期を見直す必要が考えられるのである。ただし、この点については、本格的な整理作業時に、全ての資料を観察することにより、慎重に判断したいと考えている。

第2節 塚谷古墳について

これまでの成果を踏まえて塚谷古墳の初葬・追葬時期について述べる。セット関係や器種組成を無視した上で出土遺物の中で最も古相を示すのは4の杯身の高台部と13.14の無蓋高杯と思われる。無蓋高杯は低脚化する無蓋高杯とは別系列の高杯で概ねTK46型式に比定される。

1の杯蓋と16の無蓋高杯TK48型式に、2の杯蓋は器高がやや低くなる傾向を示すが1と同様にTK48型式に比定したい。土師器では10の杯を飛鳥のIII期に、5の杯と7の杯を飛鳥のIV期に比定したい。これら遺物を初葬時から追葬時にかけての遺物と解釈するという前提に立つならば、TK46型式で初葬が行われ、TK48型式での追葬を想定できる。また長頸瓶の鉄錆の副葬が無い点、墳丘盛土の版築の状況、生産基盤を無視した立地などからも明らかに6世紀の群集墳とは7世紀構築の古墳の様相が異なっていることも指摘しておきたい。また出土遺物の須恵器や窯壁は分析を待たなければいけないが、おそらく隣接する小谷窯跡のいずれかの窯のものである可能性が高いことから塚谷古墳の被葬者は小谷窯跡の操業に深く関与していたのであろう。そして打越窯に隣接する神懸神社古墳と同様にこれら窯壁や須恵器は被葬者の社会的な位置づけを象徴的に表す意味をもつと思われる。今後塚谷古墳を含めて、これらの終末期の古墳を検討すべきであろう。

註

- (1) ここでの版築とは寺院の基礎などに見られる版築とは異なるものである。表現としては版築状の盛土と称した方が正しいかもしれない。
- (2) 打越窯もTK217型式からTK48型式かけて操業し、神懸神社古墳も出土遺物からTK217型式の初葬が行われ、TK46型式、TK48型式での2回の追葬が行われていると考えられる。坂出市教育委員会今井和彦氏、香川県埋蔵文化財調査センター佐藤充馬氏からご教示を得た。記して感謝します。
- 「神懸神社古墳」『坂出市史資料編』坂出市1988
- (3) 和泉陶邑窯周辺の檜尾塚原古墳群(5号墳)においても、主体部の須恵器甕棺の中から窯壁片が1点確認されている。中村浩氏は5号墳の被葬者を須恵器生産に関与した人物と位置付けている。

報告書抄録

ふりがな	こたにかまあと		つかたにこふん											
書名	小谷窯跡		塚谷古墳											
副書名														
巻次														
シリーズ名	高松東ファクトリーパーク造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報													
シリーズ番号														
編著者名	西岡達哉 谷畠雅穂 喜岡永光 信里芳紀													
編集機関	(財)香川県埋蔵文化財調査センター													
所在地	〒762 香川県坂出市府中町南谷5004-1				TEL 0877-48-2191									
発行年月日	西暦 1997年 3月 31日													
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因							
こたにかまあと 小谷窯跡	かがねんきたぐん 香川県木田郡 みきちょういのえ 三木町井上	37341	34°18'07"	134°10'40"	平成8年 4月1日～ 平成8年 9月30日	8,800	高松東ファ クトリーパー ク造成事 業							
つかたにこふん 塚谷古墳						7,000								
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項									
小谷窯跡	窯跡	7世紀	須恵器窯跡 焼成土坑 灰原	須恵器										
塚谷古墳	古墳	7世紀	円墳 焼成土坑	須恵器 耳環										

高松東ファクトリーパーク造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

小谷窯跡
塚谷古墳

1997年3月31日

編集 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

発行 香川県教育委員会

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

印刷 セキ株式会社